医学研究院が豪メルボルン大学とワークショップ「気候変動×移民の健康～日豪を結ぶ課題と可能性」を開催

7月9日（水）・10日（木）に、医学研究院と豪メルボルン大学の医学・歯学・保健科学研究院で「気候変動×移民の健康～日豪を結ぶ課題と可能性」と題した研究ワークショップを開催しました。

両校は令和5年に共同出資の共同研究ワークショップスファンドを立ち上げて以降、令和7年度まで合計20件のワークショップを支援し、新たな研究シーズの発掘を行ってきました。今回のワークショップは、昨年12月から両大学で交流を進める中で実現したものです。医学研究院からは上田佳代教授及びサークセス・セポソ准教授、メルボルン大学からは気候変動に関する政府間パネル・IPCCに関わるキャスリン・ボウエン教授を中心に準備を進めてきました。

1日目は、上田教授と田中伸哉医学研究院長の挨拶で始まり、気候変動と移民労働者の健康に関する問題が交差する現場をテーマに、両国でいや増す移民労働者の健康問題と気候変動の関連性について、社会医学、グローバルヘルス、政策、社会正義から多角的に探る機会となりました。

2日目は、セポソ准教授が行ったスコーピングレビューを基に、学内外参加者を含め、気候変動、農業移民、既存住民を含めた地域食糧保障、医療制度への期待と想定のギャップについて、幅広い議論が行われ、今後の共同研究計画立案に繋がりました。

2日間を通じて学内外から延べ74名が参加し、盛会のうちに終了しました。今後も、両校医学研究院主導による、新たなアプローチでの社会医学研究が期待されます。

（医学研究院、国際連携推進本部）

7月9日（水）講演内容

弘前大学大学院医学研究科 吉田　一隆　特任准教授	青森県における外国人労働者の健康
北海道大学公共政策大学院 池　炫周　教授	近年の北海道における酷暑と豪雪と移民の健康影響と社会正義
北海道教育大学 森谷　康文　准教授	北海道地域における外国人労働者に係る概括
メルボルン大学ポピュレーション＆グローバルヘルス学院 カレン・ブロック　准教授	気候変動の影響下での移民・難民の健康福祉
メルボルン大学ポピュレーション＆グローバルヘルス学院 ジェマ・タルピー・ブラウン　研究助手	太平洋諸島からの一時的移住に帯同する女性・こどもに見られる家庭内暴力被害
メルボルン大学ポピュレーション＆グローバルヘルス学院 イライザ・クロスビー　研究員	アフリカ諸国から豪州への農業移民の健康状態や地方定住

ワークショップ参加者一同

表敬訪問の様子

ディスカッション風景

フライヤー